

## CONTENTS

- 1-3 青少年交流事業  
訪日プログラム参加者が語る交流の意義について
- 4-5 フェロー研究紹介  
「オリンピックと朝鮮半島の近現代史」札幌大学地域共創学群教授 金誠
- 6 会議事業  
第19回日韓歴史家会議「海洋／海域と歴史」
- 7 助成事業紹介  
「モモの家の刺繍日記ー赤い糸が繋ぐ日韓文化交流」を終えて  
NPO法人ひいなアクション モンデンエミコ
- 8 交流エッセイ  
日韓交流おまつり2019 in Tokyo 新企画「韓国の若者と語ろう」内容詳細  
JKAF実行委員（和歌山大学3年）姜愛美  
第2回大学生訪韓団帰国報告会&OB・OG交流会を開催  
JKAF実行委員（2014年度 大学生訪韓団第1団参加）畑澤 直希
- 9-12 事業報告  
ホームページリニューアルオープン  
2019年度フェローシップ（オピニオンリーダー育成コース）第2期募集採用者決定  
青少年交流事業  
第35回日韓文化交流基金代表訪韓団  
第31回日韓文化交流基金日本文化視察団一行が来日  
日韓交流おまつり2019（ソウル・東京）開催される



公益財団法人 日韓文化交流基金

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2 ユニゾ水道橋ビル5F  
tel. 03-6261-6790 fax. 03-6261-6780

## 青少年交流事業

# 訪日プログラム参加者が語る交流の意義について

日韓国交正常化以後、最も厳しい状況にあるといわれる日韓関係ですが、日韓文化交流基金では、日韓両国の相互理解促進のためには、「出会い」「ふれあい」「語り合い」といった直接的な交流が何よりも大切であるという考えのもと、青少年交流プログラムを実施しています。

今号では、訪日プログラムに参加された3名の方（大学教員、高校教員、大学生）にインタビューを行い、それぞれの立場やこれまでの日本との関わり方など、訪日プログラムにおける交流の意義や重要性について語っていただきました。

## 「知る」ということの大切さー 沖縄、東日本大震災被災地を訪れて

カトリック大学校東アジア言語文化学部招聘教授

張良光（チャン・ヤングァン）さん

2018年1月の韓国青年沖縄産業視察団、2019年7月の韓国青年訪日団（第1団）にそれぞれ団長として参加。

### ●どんなことを感じたか

最初に団長として参加した時には沖縄がメインとなる日程で、琉球王国から日本に併合され、さらには戦争では辛い経験をされた歴史に触れました。その一方で沖縄の人たちの明るくポジティブな考えを持っている姿を見ることができました。



震災遺構として保存されている旧大川小学校を訪れ語り部の話に耳を傾ける訪日団参加者たち

## 訪日プログラム参加者が語る交流の意義について

昨年参加した韓国青年訪日団(第1団)は岩手、宮城を含む東日本大震災被災地の訪問を含む日程でした。そこで、宮城県女川町を訪れた時に、震災を経験した方が語った「いつまでも悲しんでしょうがないさ。だったら笑っていこうよ」との言葉が印象に残っています。

沖縄、女川と場所は違いますが、辛い経験をされた方たちは本当に力強く、そして誰よりも優しい心の持ち主なんだと感じました。

沖縄と女川で感じたことは、いずれも海外にいと知ることのできないことたちであり、私たちが知らなくてはならない事実であると思いました。

### ●訪日プログラムの意義とは

日韓両国の関係は厳しい状況にあります。特に参加する青少年の皆さんには、実際に相手国を訪れて、その地の風の匂い、町の温かさ、おもてなしの心などを五感で感じ取ってほしいと思います。初めて知ることがたくさんあるかも知れませんが、知らなかった分成長できる、そんな経験ができるのが訪日プログラムではないかと思います。

### ●アクションプラン

2度にわたる訪日団団長の経験を経て、私自身でも何かできることはないかと考えていたところ、折しも訪日プログラム参加者のOB・OG会組織である「KJAF(Korea Japan Alumni Forum)」が立ち上がったので、その顧問として活動しています。

また、最近では、日本料理を作りながら日本語を学ぶことのできる動画配信の準備を進めています。他にも、日本を自転車で巡りながら出会った人と交流することや絵手紙を用いた交流プロジェクトなどを企画しています。

### ●伝えたいこと

現代はインターネット、SNSの社会であり、ニュースの受け取り手である私たちは、膨大な情報の中から、自分の興味・関心に合わせて情報を選ぶ時代になっています。

両国の青少年の皆さんには、日本から見た韓国、韓国から見た日本ではなく、同じ時代を生きる人間としてもう一度考えてほしいと思います。そのためにも、実際に相手国を訪れ、現地で文化や相手の振る舞いなどを感じて話し合うことで相互理解が深まるのではないかと考えています。



ひめゆり平和祈念資料館で島袋淑子館長(当時)による平和講話を聴く韓国の青年たち(写真左から2人目が張良光さん)

## 訪日団員としての参加経験を教え、子どもたちにつなげる

大邱大元高等学校教諭(日本語担当)

趙玟暎(チョ・ミンギョン)さん

大学在学中の2005年1月に釜山日本語弁論大会入賞者等訪日団に団員として参加。また、2018年1月の韓国青年訪日団(第7団)に引率として参加。

### ●どんなことを感じたか

大学時代に日本語を専攻し、日本語を学ぶうちに自然と日本に関心を持つようになりました。2004年、在釜山日本総領事館で開かれた日本語弁論大会に出場し、入賞したのを契機に初めて日本を訪れました。大学で日本語を学んでいたものの、当時はそれほど使いこなすことはできなかったのですが、何とか駆使しているうちに次第に自分の日本語に自信がわいてきたことを覚えています。

また、ホームステイなどで訪れた島根県では手打ちそばを作ったり、それをホストファミリーと一緒に食べたりと、当時の様子を今でも鮮明に記憶しています。

### ●訪日プログラムの意義とは

当時大学生だった私にとって、訪日プログラムは自分一人では知ることのできない、新しい日本に出会うきっかけとなりました。

また、個人の旅行では決して訪れることのできない場所を訪問したり体験できたことが大きかったです。

東京や大阪といった大都市は個人旅行でも訪れることがで



学生の頃、訪日団団員として初めて訪れた金閣寺にて(写真真ん中が趙玟暎さん:2005年1月)



勤務先の学校で、生徒たちに生け花の指導をする趙玟暎さん(写真中央左側)。日本の華道小原流家元4級の資格をお持ちです

きますが、外国人が個人では行うことのできない交流活動をはじめ、体験プログラムやレベルの高い講義が含まれていることがこのプログラムの魅力だと思います。

### ●アクションプラン

現在、私は韓国・大邱市の高校に日本語教師として勤めていますが、教え子たちにもぜひともこのようなプログラムに参加してもらいたいという思いがあります。そのため機会があるごとに在釜山日本総領事館で開かれる行事に参加を勧めています。

行事で良い成績を修めることで、訪日プログラムに参加することができるので、教え子はもちろん指導する私自身にとっても大変ですが、行事で入賞してプログラムに参加した教え子たちの姿を見ると、これまでの苦労も忘れ、教師としてのやりがいを感じます。

### ●伝えたいこと

大げさかも知れませんが、この訪日プログラムは、私の人生において、進路を決める際に大きな契機となりました。大学卒業後、日本とかかわりのある他の仕事をしていたのですが、結果的には自分自身が一番得意なことを活かして社会の役に立ちたいと考え、日本語教師の道を選びました。

また、2018年に引率した高校生たちは卒業後、多くが日本の大学に進学して一生懸命学んでいます。きっとこの学生たちも、これから日韓両国の相互理解促進のために力を尽くしてくれることと思います。私はそんな学生たちの未来をとっても楽しみにしています。

## 出会いから解決の糸口が見つかる

カトリック大学校心理学科 3年

**金龍會** (キム・ヨンフェ) さん

2019年7月の韓国青年訪日団(第1回)に参加。その後、訪問ガイドブック『東日本大震災・その日の記憶』を制作したほか、KJAFの会長としても活動。

### ●どんなことを感じたか

2013年に大学に入学してから日本語の勉強を始めました。翌年の2014年に個人で北海道を旅行したのが初めての日本訪問でした。旅行中の札幌では、ホテルに戻ろうとして道に迷ってしまったのですが、偶然出会った中年の女性が親切にもホテルまで案内してくださり、とても感動したことを覚えています。

昨年夏、「防災ツーリズムと被災地復興状況の視察」をテーマに実施された訪日団に参加しました。東日本大震災という韓国では原発事故のイメージが強いのですが、実際に自分で

宮城・岩手の現地を訪れ、震災時の極限の状況での体験を経て今まで歩いてこられた方々の足跡を見聞きました。

また、震災の経験を後世に伝えるために住民が力をあわせるといった精神的な部分、それぞれの地域にある文化的な良いものを保存していく姿などから日本らしさを学び、これまで以上に日本を理解することができました。

### ●アクションプラン

訪日プログラムでとても貴重な経験をしたので、韓国の人たちにも東日本大震災被災地のことを少しでも知ってもらい、被災地の復興に少しでも役に立てればとの思いから、同じ団に参加した仲間たちと共に、訪問ガイドブック『東日本大震災・その日の記憶』を制作しました。

### ●訪日プログラムの意義とは

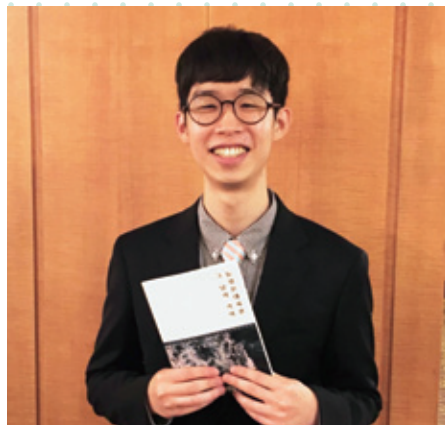
訪日プログラムには、大学生たちとの交流やホームステイといった、個人旅行では決して経験することのできない「直接の交流」が含まれている点に大きな意味があると思います。「直接の交流」による関係が相手との間でできていると、何か問題が発生した時に、「会って話すことで、誤解を解くことができるかもしれない」という積極的な考え方へとつながります。現在のように日韓関係が難しい局面においても、解決の糸口を見つけることができるのではないかと思います。

### ●伝えたいこと

訪日プログラムへの参加後、自分たちが経験したことを今後も活かしていくために、訪日プログラムのOB・OG会組織として、昨年KJAF(Korea Japan Alumni Forum)を結成しました。一足先に発足していた日本側のOB・OG会組織であるJKAFと交流を始めています。

一人では活動することが難しい場合でも、訪日プログラムへの参加を契機に日韓交流に関心を持つようになったメンバーが、力をあわせて活動できるようになりました。

これからも多様な分野での交流活動を発掘しながら、日韓の人的交流を続けていきたいと思っています。



仲間と一緒に作った訪問ガイドブックを手にする金龍會さん

フェロー研究紹介のページでは、各分野で日本研究、韓国研究を行っている研究者による様々な見解や研究成果を紹介しています。

今号では、2014年度訪韓フェローとして、「朝鮮半島における解放前後(1940年代)のスポーツ活動に関する研究」をテーマに研究された金誠氏に執筆いただいた内容を紹介いたします。

## 平昌オリンピック(2018)の政治性

2018年2月に開催された第23回冬季オリンピック競技大会(平昌オリンピック)は露骨に政治性の現れた大会となった。韓国・アメリカと北朝鮮との緊張した関係のなかで、アメリカに対抗して北朝鮮がCBMの開発やミサイルの発射を行えば、韓国は北朝鮮のオリンピック参加を促すために米韓軍事合同演習を延期するようにアメリカ側に働きかけるなど、オリンピック参加や開催への協力が互いの外交カードとなって展開される様相を呈したのであった。

こうして「平昌オリンピック」が「平壤オリンピック」と揶揄されるほど北朝鮮との関係を強く意識させる大会となったのである。他にも女子アイスホッケーの統一チームや北朝鮮の政府高官の開会式への出席が、オリンピック後には米朝会談の実現へと繋がったこと等は記憶に新しい。

本稿ではこうした政治性を帯びることになったオリンピックと朝鮮半島の近現代史について簡単に触れてみたい。

## 帝国日本と朝鮮人オリンピアン

オリンピックと朝鮮との関係の始まりは植民地期に遡る。1932年、アメリカのロサンゼルスで開催された第10回オリンピック競技大会に日本代表選手として朝鮮人選手が3名参加したことがその端緒であった。このロサンゼルス五輪に参加した選手はマラソンの金恩培、権泰夏、ボクシングの黄乙秀である。

また大日本体育協会からは朝鮮人として唯一協会の理事にまでなった李相佰が同行した。金恩培は朝鮮の養正高等普通学校の出身であり、日本人指導者峰岸昌太郎に見出されて長距離種目に秀でた才能を発揮していた。権泰夏と黄乙秀は共に日本の明治大学に留学しており、李相佰は早稲田大学バスケットボール部の出身であった。

それぞれが何かしら日本との接点を持ちつつ、外地たる朝鮮半島を出自としながらも彼らの持つ能力が認められて日本を代表する選手・役員として選抜されたのだった。

ロサンゼルスに渡った彼らは在米コリアンたちから歓迎を受けた。民族意識を強く持った同胞の多くに歓迎されたものの、なかには朝鮮人であるにも関わらず、日本代表として日の丸を背負っていることに不服を述べるものもいたという。植民地支配を受ける立場でスポーツに秀でた才能を発揮することの難しさを露見した出来事であった。

1936年の第11回オリンピック競技大会はドイツのベルリ

ンで開催された。この大会にもやはり朝鮮人選手7名が選抜され、日本選手団に加わっている。李相佰はこの大会でも大日本体育協会の総務委員として同行していた。このことが解放後の彼の人生を決定づける。

選手として選出されたのはマラソンの孫基禎、南昇龍、サッカーの金容植、バスケットボールの李性求、張利鎮、廉殷鉉、ボクシングの李奎煥らであった。この7名の中でもマラソンの孫基禎と南昇龍の活躍は目覚しかった。

孫基禎は8月9日に行われたマラソンで2時間29分19秒2という記録を出して優勝を果たし、南昇龍は3位入賞という結果を同時に出したのである。両者は朝鮮人選手として初めてのメダリストになった。

彼らの活躍は植民地支配を受けていた朝鮮民族に勇気を与え、植民地支配を受ける朝鮮民族の劣等感を払拭する役割を果たした。ただこの孫基禎の優勝は民族意識を発散させる捌け口ともなり、8月25日付の『東亜日報』には表彰台に立った孫基禎の胸の日の丸を消し去った写真が掲載され、それを主導した李吉用をはじめとする東亜日報関係者らが朝鮮総督府から処罰を受けるとともに、東亜日報社は無期停刊の処分を受ける事態となったのであった(日章旗抹消事件)。(写真1)(写真2)

続く1940年の第12回オリンピック競技大会は東京で開催される予定だったが、日中戦争に收拾がつけられない日本はオリンピックを開催できる状況ではなく、1938年7月にオリンピックの開催権を返上することとなった。

この時、オリンピックが開催されて、日本の参加が叶っていれば、例えば陸上競技の三段跳では1939年のユニバーシアードで優勝していた金源権が金メダル候補の筆頭に挙がっていたことだろう。

## 解放とロンドンオリンピック(1948)への参加

1945年8月に日本の支配下から解放された朝鮮半島ではスポーツ界においても新たな時代への模索が始まった。植民地期に朝鮮において組織された朝鮮体育会(南側の朝鮮人が主



(写真1) 表彰台の孫基禎



(写真2) 『東亜日報』1936年8月25日付

導した組織)は、日本の植民地支配の下でも民族主義を標榜しながら、民族のスポーツの発展に寄与したことを自負しており、いち早く解放後のスポーツ活動を開始した李相佰を朝鮮のスポーツ界から排除しようとした。

しかし、1948年の第14回オリンピック競技大会がロンドンで開催(7月29日～8月14日)されることとなり、その参加を希望する中で、朝鮮のスポーツ界は李相佰に頼らざるを得なくなる。何故なら李相佰こそが解放後の朝鮮で最もオリンピック行政に通じ、オリンピック参加に関するノウハウを知り、国際的にも強い人脈を持っていたからである。朝鮮スポーツ界からの要請を受けた李相佰を中心に国内(南側が中心)に朝鮮オリンピック委員会(KOC)が創設され、その後、無事に国際オリンピック委員会(IOC)から国内オリンピック委員会として承認を得ることができたのであった。

こうして「KOREA」の呼称でIOCに加盟を果たし、朝鮮半島のスポーツ界は解放後数年という短期間で奇跡的とも言えるオリンピック参加にまで漕ぎ着けた。このロンドン五輪には団長に英雄孫基禎が選ばれ、また女性の選手として初めて円盤投の朴鳳植がオリンピックに参加するなど、成績こそ芳しくはなかったが、朝鮮スポーツ界の新たな1ページを開いたのであった。

ロンドン五輪後、朝鮮半島は南北に分断され、朝鮮戦争を経験する。韓国はロンドン五輪の次のヘルシンキ大会にも参加し、継続的にオリンピックに参加していくが、北朝鮮は暫くオリンピックには参加しなかった。両者がオリンピックで話題になるのは1964年の第18回オリンピック競技大会、すなわち東京五輪でのことであった。

ただここで話題になったのは世界に南北分断の現実を知らしめるものだった。北朝鮮の女性アスリートに陸上女子800m走で当時世界記録を持っていた辛金丹という選手がいたが、彼女が前年にオリンピックに対抗してインドネシアで開催された新興国競技大会(GANEFO)へ参加していたことを知った国際陸上競技連盟(IAAF)は、オリンピック出場資格1年間停止の処分を勧告した。一旦はIOCの態度の軟化によって、オリンピック参加を認める方向が検討され、北朝鮮選手団と共に東京まで来ていたのだが、IAAFの処分は変わらず、北朝鮮選手団はこの処分を不服として辛金丹とともに東京を去ることになった。

辛金丹は南北に分断された朝鮮半島の離散家族であり、この時、南で生活していた辛金丹の父が東京で娘と再会するために渡日してきていた。北朝鮮選手団がオリンピック不参加を表明して日本を去ることになったため、父との東京での再会はずいぶん遅くなり、この刹那の再会劇がメディアに大きく取り上げられたのだった。(写真3)

(表1) オリンピックと南北体育会談

年月日	場所	名称	内容
1963年 1月24日	スイス (ローザンヌ)	冬季オリンピック単一チーム構成会談	東京オリンピック単一チーム構成問題について協議(決裂、別途参加)
5月17日		単一チーム構成実務1次会談	
7月26日		// 2次会談	
1984年 4月 9日	香港	第1次 南北体育会談	ロサンゼルスオリンピック単一チーム構成問題について協議(決裂、北朝鮮不参加)
4月30日		第2次 //	
5月25日		第3次 //	
1985年10月 8日～ 9日		第1次 南北体育会談	オリンピック単一チーム構成問題および共同開催について協議(決裂、北朝鮮側がIOC修正案を拒否、北朝鮮不参加)
1986年 1月 8日～ 9日	スイス (ローザンヌ)	第2次 //	
6月10日～11日		第3次 //	
1987年 7月14日～15日		第4次 //	

『대한체육회90년사 (大韓体育会90年史)』 p.351の表から作成

## ソウルオリンピック(1988)と南北関係

辛金丹親子の悲劇から時を経た1972年のミュンヘン大会から北朝鮮はオリンピックに参加できるようになる。東西冷戦の構造はオリンピックに大きな影響を与え、オリンピックはテロ事件やボイコット問題に揺れていた。そんな中1981年、バーデンバーデンで開催されたIOC総会において1988年、第24回オリンピック競技大会の開催地が韓国のソウルに決定する。韓国にとっても北朝鮮にとっても衝撃的な瞬間だった。

この決定の裏には国家・企業が官民一体で臨んだ韓国の総力戦の成果が色濃く現れた。北朝鮮の面目は潰され、1983年10月には全斗煥大統領を狙ったラングーンでの爆破事件や1987年11月に中東から韓国に戻る大韓航空機がビルマ沖で爆破される事件が起きた。これらは北朝鮮によるソウルオリンピックの妨害工作であったとされている。しかし、ソウルオリンピックは開催され、韓国は北朝鮮との国際社会での地位に水をあけることになったのであった。(表1)(写真4)

このようにオリンピックと朝鮮半島は近現代史の中で植民地支配の問題から冷戦構造で対立する南北の問題を多分に含みながら推移してきた。オリンピックを単なるスポーツの祭典や、単なる政治の道具として理解するのではなく、それに関わる人々やアクターの動きを見ていくことで、そこに存在する人々の思想や価値観、国家体制の揺らぎを分析することに寄与するものと思料する。

### 参考文献・資料

- 金誠『近代日本・朝鮮とスポーツ: 支配と抵抗、そして協力へ』(2017)塙書房
- 『朝日新聞』、『東亜日報』、大韓体育会『大韓体育会90年史』(2010)大韓体育会刊(韓国語)



(写真4) ソウルオリンピック



(写真3) 辛金丹関連記事『東亜日報』1964年10月10日付



## PROFILE

金 誠 (きん まこと/キム・ソン)

札幌大学地域共創学群教授  
 神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程国際協力政策専攻単位取得退学。博士(学術)。専門はスポーツ史・朝鮮近代史。著書に『近代日本・朝鮮とスポーツ: 支配と抵抗、そして協力へ』(2017年・塙書房)、共著に『スポーツの世界史』(第20章 朝鮮・韓国執筆担当 2018年・一色出版)などがある。

# 第19回日韓歴史家会議「海洋／海域と歴史」

2019年11月8日から10日までの3日間、ソウルの西江大学校で、19回目となる日韓歴史家会議が開催されました。

この会議は、2001年に日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」として発足しました。日本史、韓国史のみならず、多様な分野を専門とする両国の歴史研究者が集い、最新の研究成果の報告と、これに基づく意見の交換を行っています。

今回は、グローバルヒストリーの視点から、国境を越えて文明圏の形成と交流の舞台となってきた海洋・海域の重要性について検討すべく、「海洋／海域と歴史」と題する全体テーマの下、日本側から12名、韓国側からは13名の歴史家が参加しました。

「海洋／海洋史研究の現況と展望」、「大西洋世界の形成と西欧中心的世界史の成立」、「海洋／海域から見た東アジアの歴史」と題する三つのセッション別に日韓双方からの報告とこれに対する討論が行われ、最終日の総合討論に至るまで活発

な議論が交わされました。

初日の11月8日には、会議を記念しての講演会「歴史家の誕生」を開催し、一橋大学・東京大学名誉教授の油井大三郎氏と、韓国教員大学校名誉教授の朱明哲(ジュ・ミョンチョル)氏が、歴史研究者を志してから現在に至るまでの道のりや、研究の転機となった出来事などについて語りました。

講演会の内容を含む今回の会議の報告書は、3月中に刊行の予定です。



各セッションではそれぞれのテーマについて意見が交わされました。



記念講演会「歴史家の誕生」

## 第19回日韓歴史家会議 (2019.11.8-11.10、会場：ソウル・西江大学校)「海洋／海域と歴史」

- ◆11/8 (金) 日韓歴史家会議開催記念講演会「歴史家の誕生」  
「自分は何を営んできた人間なのか」 朱明哲(ジュ・ミョンチョル) 韓国教員大名誉教授  
「脱近代の歴史認識と歴史教育を求めて」 油井大三郎 一橋大・東京大名誉教授

- ◆11/9 (土)
- ◇第1セッション「海洋/海洋史研究の現況と展望」  
司会：朴檀(パク・タン：西江大)  
報告：「過去10年来の韓国学界における海洋史研究」 河世鳳(ハ・セボン：韓国海洋大)  
「海から見た小西行長—その世界観と政治的ヴィジョン—」 上田信(立教大)  
討論：六反田豊(東京大)  
都珍淳(ト・ジンソン：昌原大)

- ◇第2セッション「大西洋世界の形成と西欧中心的世界史の成立」  
司会：玄在烈(ヒョン・ジェヨル：韓国海洋大)  
報告：「大西洋の観点から「大洋間」観点へ—グローバル・ヒストリーの新たな視角を求めて—」 朱京哲(ジュ・ギョンチョル：ソウル大)  
「世界分割(demarcación)の夢」 合田昌史(京都大)  
討論：左近幸村(新潟大)  
南宗局(ナム・ジョングク：梨花女子大)

- ◇第3セッション「海洋/海域から見た東アジアの歴史」  
司会：都珍淳(ト・ジンソン：昌原大)  
「海鼠、鮓、太刀魚—気候変動と清朝漁業紛争の展開—」  
金文基(キム・ムンギ：釜慶大)  
「近現代日本を海域史で考える」 高江洲昌哉(神奈川大)  
討論：鎌谷かおる(立命館大)  
李秀烈(イ・スヨル：韓国海洋大)

- ◆11/10 (日)
- ◇第4セッション「総合討論」  
司会：尹炳男(ユン・ビョンナム：西江大)

### 参加者名簿 (日本側) \*敬称略、五十音順

飯島 渉	青山学院大学	医療社会史
上田 信	立教大学	中国史(明清時代)、生態環境史、アジア社会論
小田中 直樹	東北大学	フランス社会経済史、歴史関連諸科学
鎌谷 かおる	立命館大学	歴史学(日本史)
木畑 洋一	東京大学・成城大学	国際関係史
合田 昌史	京都大学	西洋史学
左近 幸村	新潟大学	経済史、ロシア史
須田 努	明治大学	日本近世史・近代史
高江洲 昌哉	神奈川大学	日本近現代史、地方制度史、島嶼史
宮嶋 博史	成均館大学校	朝鮮史
油井 大三郎	一橋大学・東京大学	アメリカ現代史
六反田 豊	東京大学	朝鮮中世・近世史

### 参加者名簿 (韓国側) \*敬称略、カナダラ潤

金 文 基	釜慶大学校	近世東アジア環境史、海洋史、博物学
南 宗 局	梨花女子大学校	中世地中海交流史
都 珍 淳	国立昌原大学校	韓国近現代史
朴 檀	西江大学校	ヨーロッパ現代史、フランス史
裴 京 漢	釜山大学校韓国民俗文化研究所	中国近現代政治史、政治思想史
徐 民 教	東國大学校	日本近代史
尹 炳 男	西江大学校	東洋近現代史
李 秀 烈	韓国海洋大学校国際海洋問題研究所	近現代日本思想史、東アジア史
朱 京 哲	ソウル大学校	ヨーロッパ近代史
朱 明 哲	韓国教員大学校	西洋史
河 世 鳳	韓国海洋大学校	中国近代史、東アジア近代史
許 芝 銀	西江大学校	近世韓日関係史
玄 在 烈	韓国海洋大学校国際海洋問題研究所	西洋史

# 「モモの家の刺繍日記—赤い糸が繋ぐ日韓文化交流」を終えて

NPO法人ひいなアクション **モンデン エミコ**

きっかけは、2018年春に韓国で出版された1冊の本でした。本のタイトルは『モモの家の刺繍日記—モモが生まれてアオがお兄ちゃんになる386日間の記録—(原題: 모모네 자수 일기-모모가 태어나고, 아오가 오빠가 되어 가는 386일간의 기록-)』。私、モンデンエミコの作品集です。

この本は、2016年に金沢21世紀美術館で展示された《モンデンエミコの刺繍日記》を韓国の出版社ダンチュの編集者が偶然見て作品に共感し、出版へとつながりました。《刺繍日記》はレシートや封筒など身の回りにある紙に、日々の出来事を赤い糸で縫い綴った作品です。

子育て中のアーティストとして私も活動に参加しているNPOひいなアクションの企画で、この刺繍日記をソウルで展示しようということになりました。作品の原画を見てもらうことで、韓国の方々とともに繋がることのできるのではないかと考えたからです。そして、日韓文化交流基金の助成を受け、展覧会を実現することができました。

会場である「雨乃日珈琲店」の壁面には、《刺繍日記》の原画とダンチュの出版までの経緯がわかる資料の両方を並べることで、「人と人との出会いを伝える展覧会にしたい」という思いを込めました。



《刺繍日記》原画作品

会期中にはワークショップとトークイベントを実施し、さらにダンチュの企画で、書店「B-PLATFORM」での展示とトークイベントも開催しました。

展示に向けて最終準備を進めていた7月、日韓情勢の悪化という思いもよらない事態が起こりました。外務省からの警戒レベルが日に日に上がり、渡航前には注意喚起の情報が出ていました。このような時だからこそ、文化交流が重要だと感じながらも、6歳と3歳の子どもを連れての渡航でもあり、不安な気持ちでいっぱいでした。

また、日本人である私たちと仕事をする中で、韓国側の協力者であるダンチュに不利益や危険が及ぶのではないかと、イベントに参加してくれる人はいるのだろうか、不安は募るばかりでした。

いざ渡航した2019年8月21日、日本の報道とは違い、韓国には穏やかな景色が広がっていました。そしてダンチュの方々との2年振りの再会に胸が高鳴りました。

ワークショップでは、参加者自



ワークショップの様子

身が前日の出来事を日記にして紙に縫い綴りました。韓国語ができない私は通訳を介して言葉を交わしていましたが、一緒に手を動かしている時間は、まるで糸と針で会話をしている様な感覚がありました。

トークイベントでは、私が作品制作について話した後、NPOひいなアクション代表の高橋律子から団体の活動説明があり、続いてダンチュのパク・シヨンさんが出版に至る経緯を話してくださいました。この1冊の本がどれほど丁寧に考えられ、多くの方の協力によって生み出されたものであったかを改めて実感することができました。

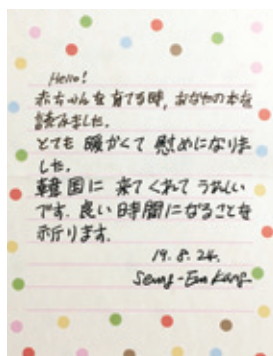


トークイベントの様子

質疑応答では「女性アーティストを応援する活動は世界的にある動きなのか(40代男性)」「子育てと制作を両立する生き方もあることが分かり、少し楽観的になれた(20代女性)」などの感想がありました。

特に、子育て中だという30代女性との出会いでは、作品を通して交流することの意味を考えさせられました。その女性は、出産後に旦那様から私の本をプレゼントしてもらったこと、本を通して日本を身近に感じるようになったこと、飛行機が欠航となり金沢に行けなくなったことなどを話してくれました。そして翻訳機を使って書いた手紙を手渡してくれました。

私の作品が誰かの人生の力になっていたことに感動し、彼女の笑顔と手紙に胸が熱くなりました。



参加者からの手紙

このような様々な交流を通し、女性のもつ葛藤や喜びは世界共通であることと、文化交流の重要性をさらに強く実感しました。

最後に、この活動を応援してくださった両国の協力者の方々に感謝いたします。この先も私のささやかな日常を縫い綴っていきます。

## PROFILE

**モンデン エミコ** (もんでん えみこ)

1979年愛知県生まれ、石川県金沢市在住。7才と3才の母。金沢美術工芸大学彫刻専攻修了。仕事、出産と自身の生き方の変化により制作が大きくかわる。現在は、コラージュによる、刺繍日記・モビール作品を制作。





## ● 日韓交流おまつり2019 in Tokyo 新企画 「韓国の若者と語ろう」内容詳細

JKAF実行委員(和歌山大学3年) 姜愛美

11回目となる「日韓交流おまつり in Tokyo」が2019年9月28、29日に東京の日比谷公園にて開催されました。JKAFでは、訪日団団員として日本を訪れている韓国の大学生や青年たちと共同で、日韓交流ブース「韓国の若者と語ろう」と題して、会場を訪れた方と日韓に関するテーマについて話し合うブースを出展しました。

「韓国の若者と語ろう」には、2日間の開催期間中に、合計で300名の方が参加してくださり、韓国の文化や観光地、大学生活の違いから、日韓の間にある歴史的問題に関する意見や現在韓国で行われている日本製品の不買運動についてなど、幅広い内容についての討論が行われました。また、韓国の大学生から日本について質問をする場面も見受けられ、日本に対する理解をより深める機会にもなったようです。

訪日団員として参加した韓国の学生の意見の中には、JENESYSプログラムに参加した理由として、日本に来なければわからないことがあると思ったこと、歴史学を専攻し、日韓の歴史も学んでいるため、これからの日韓関係がどの様に進んでいくのかを自分の目で見なくてはと思ったから等の意見がありました。また、不買運動に伴って実際日本に行くことを控える風潮があるものの、それは日本人を批判してのものではないという意見もありました。

江陵原州大学4年の朴秀賀(パク・スハ)さんは、「日本の多くの方々が韓国について関心を持ってくださってありがたいと思いました。最近日韓関係が悪いことに対しての心配をしていますが、交流ブースを通じて互いについて理解し合い、民間レベルでは仲が良いことを確かめることができました」と述べていました。



交流ブース受付で来場者に参加を呼び掛けるJKAFメンバーたち

また、交流ブースに参加した来場者からは「ニュースを見て韓国に行く危険があるかもしれないと思っていたが、そんなことはないという言葉で直接聞いて安心した」という声も聞かれました。

今回の交流ブースでは、日ごるニュースなどで見聞きする情報に関して意見交換を行うことで、両国の本当の姿を知ることができ、参加者にとっては、実際の経験から新しい日韓の顔を覗くことのできる2日間となりました。

日韓交流おまつりでは初の討論ブースということで、たくさんメディアから取材を受けるなど大きな注目を浴びました。



おまつり当日は、テレビ、新聞など多くのマスコミからも取材を受けました

今後もJKAFは対話の土壌を築き、日韓関係の土台となる民間交流を継続するためのイベントを開催していきます。

## ● 第2回大学生訪韓団帰国報告会&OB・OG交流会を開催

JKAF実行委員(2014年度 大学生訪韓団第1回参加) 畑澤 直希

2019年12月14日(土)に、大学生訪韓団(以下、訪韓団)のOB・OG組織であるJapan Korea Alumni Forum(以下、JKAF)と日韓文化交流基金のイベント、「第2回大学生訪韓団帰国報告会&OB・OG交流会」が開催されました。当日は全国各地から21名のOB・OGが参加し、アットホームな雰囲気の中か交流を深めました。

報告会では、今年8月に訪韓団団員として韓国へ渡航したメンバーが訪韓活動の様子を発表しました。また今回、初の試みとして、韓国側で発足した訪日団参加経験者のOB・OG会であるKorea Japan Alumni Forum(以下KJAF)とオンラインで会場をつなぎ、メンバーからの訪日団団員として日本を訪問した際の活動報告を実施、訪韓団のOB・OGたちと国境を越えた交流を行いました。KJAFの会長である金龍曾(キム・ヨンフェ)さんからは、「訪日団への参加を機に、日本と韓国との関係性を見直すことを意識した。訪日団への参加後、韓国に戻ってから日本との経済関係を学び直している」といったコメントをいただきました。

また、後半の交流会では、韓国で流行っているゲームを用いたのアイスブレイクなどを通じ、団を超えた縦と横のつながりを育みました。

JKAFでは今後も定期的に訪韓団OB・OGが集まる場を設け、日本人同士の交流を育むとともに、韓国のKJAFを通じ、韓国側のOB・OGとも交流を続けていきます。



訪韓帰国報告会と交流会を終えて一同で記念撮影



# ホームページリニューアルオープン

当基金のホームページ(https://www.jkcf.or.jp/)が、11月20日に装いも新たにリニューアルオープンしました。リニューアルを機に新たなコンテンツとして、「日韓交流ガイド」、「日韓交流事例紹介」のページがオープンしました。

これからも様々な情報を掲載していきますので、どうぞご期待ください。



## 2019年度フェロシップ(オピニオンリーダー育成コース) 第2期募集採用者決定

### 訪日フェロー:4名

氏名	研究テーマ	所属機関
鄭原東	韓日関係改善のための各界の世論主導層との面談調査による意見聴取および改善策模索	大韓民国国会議員李貞鉉特別補佐官
韓在鎬	日韓若年層の交流拡大を通じた相互発展関係の構築を巡る対策研究	韓国放送 (KBS) 記者
明熙眞	日韓ジャーナリストの相互認識「フレーム」に対する質的研究—根拠理論による分析	ソウル新聞記者
河銀靜	韓国に投資した日本企業の現況	法務法人世宗 (Shin&Kim) パートナー弁護士

### 訪韓フェロー:1名

氏名	研究テーマ	所属機関
時吉達也	韓国マスメディア研究	産経新聞社外信部記者

# 日韓文化交流基金事業報告

本号では、2019年8月1日から11月30日までの実施事業を紹介します。

## ① 青少年交流事業

### 訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国大学生訪日団	沈珪善 (シム・ギュソン) 外交部文化交流協力課 課長	30	13	17	9/23～10/2	「日韓交流おまつり2019 in Tokyo」、獨協大学、霧島市役所、埼玉県(草加市、川越市、日高市)、鹿児島県(鹿児島市、日置市、霧島市)
韓国青年訪日団 (第3団)	権益主 (クォン・イクチュ) Vector Korea Inc.	11	5	6	9/26～10/2	「日韓交流おまつり2019 in Tokyo」、埼玉県(川越市、日高市)、沖縄県(南城市、糸満市)
韓国青少年訪日団 (第1団)	呉世勳 (オ・セフン) 培花女子高等学校 校長	35	12	23		愛知県立日進西高等学校、大阪府大阪市、京都府(京都市、宇治市)、愛知県(名古屋市、日進市、常滑市、稲沢市)、岐阜県加茂郡
韓国青少年訪日団 (第2団)	金信榮 (キム・シニョン) 創意高等学校 校長	35	14	21	10/17～10/23	奈良県立榛生昇陽高等学校、大阪府(大阪市、堺市)、兵庫県神戸市、奈良県(奈良市、宇陀市)、岐阜県加茂郡、愛知県(名古屋市、常滑市)
韓国青少年訪日団 (第3団)	崔美英 (チェ・ミヨン) 徳荘中学校 教頭	30	11	19		岐阜県揖斐郡池田町立池田中学校、大阪府(大阪市、門真市)、滋賀県(彦根市、近江八幡市)、岐阜県(揖斐郡、郡上市、加茂郡)、愛知県名古屋市

韓国大学生訪日団

企業訪問  
株式会社パナソニックによる「韓国の若者の日本における就業」についての講義



韓国青年訪日団 (第3団)

「日韓交流おまつり2019 in Tokyo」ブース運営参加を通じて日本の一般市民と交流



韓国青少年訪日団 (第1団)  
書道の授業体験



韓国青少年訪日団 (第2団)  
JKAF (Japan Korea Alumni Forum)メンバーとフィールドワーク



韓国青少年訪日団 (第3団)  
名古屋市港防災センターでの地震体験

### 訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
日韓学術文化交流事業訪韓団	石橋正隆 東京都武蔵村山市立第九小学校	44	17	27	8/22～8/31	山儀初等学校、オジン中学校、坪村経営高等学校、淑明女子大学校、ソウル特別市、京畿道(城南市、安養市、水原市、坡州市)、世宗特別自治市、全羅北道(全州市、完州郡)、慶尚南道(山清郡、釜山広域市)
大学生訪韓団	池田洋一 外務省 アジア大洋州局北東アジア第一課 地域調整官 兼 日韓交流室長	30	9	21	8/28～9/6	「日韓交流おまつり2019 in Seoul」、ソウル大学校、ソウル特別市、京畿道坡州市、釜山広域市
大学生訪韓団 (スポーツ交流)	大木陽悦 国土舘大学 空手道部 副部長	18	10	8	8/28～9/2	「日韓交流おまつり2019 in Seoul」、ソウル特別市、忠清北道鎮川郡
日本青少年訪韓団 (第1団)	岩野文昭 大分県立佐伯鶴城高等学校 教頭	35	7	28		漢城大学校、培花女子高等学校、ソウル特別市、京畿道(城南市、坡州市)
日本青少年訪韓団 (第2団)	頓所裕史 新潟県教育庁高等学校教育課 副参事 兼 指導主事	35	11	24	11/10～11/16	徳成女子大学校、創意高等学校、ソウル特別市、京畿道(城南市、水原市、華城市、坡州市)
日本青少年訪韓団 (第3団)	山口太一 立命館慶祥中学校・高等学校 学年主任	30	13	17		ソウル特別市、京畿道(義王市、水原市、城南市、坡州市、龍仁市)



日韓学術文化交流  
事業訪韓団  
訪問先小学校児童  
との交流



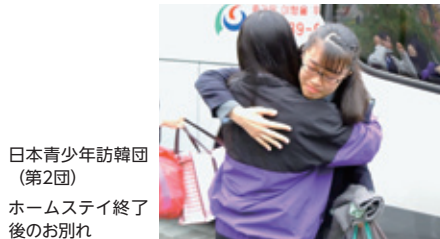
大学生訪韓団  
ソウル大で交流に  
関する講義を聴講



大学生訪韓団  
(スポーツ交流)  
空手の韓国国家代  
表選手と交流



日本青少年訪韓団  
(第1団)  
訪問先の学校で日  
本の魅力を紹介



日本青少年訪韓団  
(第2団)  
ホームステイ終了  
後のお別れ



日本青少年訪韓団  
(第3団)  
非武装地帯(DMZ)  
視察

## 第35回 日韓文化交流基金 代表訪韓団

当基金の鮫島会長をはじめ、理事、評議員から構成される代表訪韓団が、9月17日から9月20日までの4日間の日程で韓国を訪問しました。

今回で代表団の訪韓は35回目、また、期間中に贈呈式を実施する「日韓文化交流基金賞」は20回目となる節目の韓国訪問でした。

初日に表敬訪問した外交部では、李泰鎬(イ・テホ)第2次官から、「貴基金が実施されている諸活動は、民間レベルの交流は政治の影響を受けずに持続している、という両国国民への強いメッセージになる」との指摘がありました。

また、20回目の日韓文化交流基金賞贈呈式には、歴代の受賞者の方々にも多数ご出席頂く中、来賓の方々他、7月に東北地方を訪問した韓国青年訪日団の参加者で、韓国アルムナイ(Korea Japan Alumni Forum)会長の金龍會さん(本号1-3頁参照)からもスピーチを頂きました。



李泰鎬(イ・テホ) 韓国外交部第2次官を表敬訪問

日程3日目に訪問した高麗大学校グローバル日本研究院では、フェローシップでの滞日研究や、青少年交流事業の引率等、基金事業とご縁の深い先生方から、最近の日韓関係の下で日本について学ぶ学生たちの様子についてお話を伺いました。また現状打開のためのアイデアについて意見の交換を行いました。



高麗大学校グローバル日本研究院の鄭炳浩(チョン・ビョンホ)院長(写真右から2人目)ら研究者の皆さんと懇談しました



20回目となる日韓文化交流基金賞贈呈式には歴代受賞者の皆さんも集われました



基金賞贈呈式後のレセプションには、青少年交流訪日プログラムのOB・OGの皆さんも多数出席してくれました

## 第31回 韓日文化交流基金 日本文化視察団一行が来日

李相禹(イ・サンウ)韓日文化交流基金理事長を団長とする視察団一行が11月27日から3日間の日程で来日し、初日の夜には、当基金の鮫島章男会長主催の歓迎晩餐会を開催しました。

参加者は、現在の日韓関係を踏まえ、両基金の果たすべき役割等について意見交換を行いました。

# 日韓交流おまつり2019(ソウル・東京)開催される

恒例となった「日韓交流おまつり」が、9月1日にソウル・COEXにて、9月28日、29日には東京・日比谷公園を会場に、それぞれ開催されました。

今年も青少年交流事業参加者を中心にした展示ブースの開催を行ったほか、ソウルでは外部団体との協力の下、舞台公演、東京ではパフォーマンスの披露等を行いました。

## おまつり in Seoul

9月1日、ソウルのCOEXを会場に行われた「おまつり in Seoul」では、おまつりの日程にあわせて韓国を訪れた大学生訪韓団員らによる日本文化体験のための展示や、国士舘大学空手道部のメンバーによる演武披露などのほか、当基金の助成を受けて訪韓した菊の会による舞踊の披露等が行われました。



多くの来場者でにぎわう大学生訪韓団によるブース



大学生訪韓団員に教わりながら、折り紙を使ったトントン相撲を楽しむ子どもたち



国士舘大学空手道部の部員が披露する演武



菊の会メンバーとサムルノリ奏者・金徳珠(キム・ドクス)氏とのコラボレーションによるステージ

## おまつり in Tokyo

9月28、29日の二日間、東京・日比谷公園を会場に行われた「おまつり in Tokyo」では、今回初の試みとして開催された日韓交流ブース「韓国の若者と語ろう」(詳細については、本号8頁の交流エッセイをご参照ください)をはじめ、高句麗古代装束試着体験、書家・濱崎道子氏による大筆パフォーマンス、ミニヒーローショー「高麗戦士トライ」、日韓ダンサー2名によるダンスパフォーマンスが行われました。



日韓交流ブース「韓国の若者と語ろう」への参加を呼び掛ける学生ボランティア



色鮮やかな高句麗古代装束を身に着け記念撮影をする来場者たち



韓国語で 화합 (和合) と力強く筆を運ぶ書家・濱崎道子氏



息の合った姿に多くの来場者が魅了されたダンスパフォーマンス



「高麗戦士トライ」ショーに出演した城西大学経営学部石井龍太ゼミナールの皆さん

戦後最悪の日韓関係ともいわれる中での開催となったため、参加者の間には不安もあったようですが、ソウルと東京の両会場には例年にも増して多くの方々が来場され、市民レベルでの交流の深まりを実感できるイベントとなりました。



## 表紙写真紹介



春の暖かな日差しを受ける「桃」の花 (埼玉県花と緑の振興センターにて、撮影:鬼海裕之)

桃の花と言えばひな祭りが連想されますが、韓国では童謡「고향의 봄 (故郷の春)」の歌詞のなかに、春の花として一番初めに登場します。